



Title	項の脱落とPASSIV : θ - 構造・格付与から解明する
Author(s)	神, 久聡; JIN, Hisatoshi
Citation	独語独文学科研究年報, 13, 55-70
Issue Date	1987-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25743
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_P55-70.pdf



項の脱落と PASSIV — θ -構造・格付与から解明する —

神 久 聡

0. 序
1. 用語といくつかの原理・原則
2. 項をブロックする、ブロックを解除する / Partizip II・zu・haben・sein の役割
3. 受動の定義
4. 準助動詞 bekommen, erhalten, kriegen
5. まとめに代えて

0. 序

ドイツ語の受動文、受動内容の文を捉えようとする、文型上は受動態受身文や能動態受身文があり、文型だけでは把握しにくそうである。ではそれぞれの受身文を受身文として成り立たせている統語上の仕組みはどうなっているのだろうか。また REZIPIENTENPASSIV¹⁾ (Helbig/Buscha) とよばれる受身文 (bekommen, erhalten, kriegen + Partizip II)²⁾ は統語面からどのように分析されるのだろうか。

Rezipientenpassiv の文 1) は、受動態で示されている文 2) とパラフレーズの関係にあるとされ、

1) Er kriegte ein Buch geschenkt. (彼は本をプレゼントしてもらった)

2) Ihm wurde ein Buch geschenkt.

1) の Er (主語、1格 NOMINATIV) と 2) の ihm (3格 DATIV) は同一の役割 (本 [= テーマ] の移動先 [到着点]) を示す名詞であると解釈される。辞書では jm et schenken で示される間接目的語の jm (2では ihm) が、1) の構文で 1格主語に格を変換したのだろうか、あるいは動詞 kriegen に特別な働きがあるのだろうか。

Haider は "Fehlende Argumente: vom Passiv zu kohärenten Infinitiven" (1986) で、受身文一般にある種の項 (Argument) が減っている — つまり具現されない — という現象に焦点をあて、広義の意味での受動文の統語面のメカニズムを解明し、Rezipientenpassiv に

ついても分析している。本稿ではHaider(1986)で用いられている原理・原則などを確認しながら受動文のメカニズムを紹介したい。

1. 用語といくつかの原理・原則

[項 (Argument)]

動詞 (あるいは形容詞) が取るべき構成名詞句 (NP) のこと。例えば動詞 *helfen* については、

3) Der Gast half dem Kind. (客が子供を助けた)

のように、主語の1格 (Nominativ) 名詞句 (*der Gast*) と3格 (Dativ) 目的語の名詞句 (*dem Kind*) が「項」と呼ばれる。これに対して、3) に対応する次の受動態4)で、虚辞の (expletiv) "es" は項ではないとされる。³⁾

4) Es wurde dem Kind geholfen.

[構造的項 (strukturelles Argument) と 語彙的項 (lexikalisches Argument)]

例えば動詞 *schlagen* (殴る) は2個の項をとる動詞である。能動態5)とそれに対応する受動態5')で、

5) Die Frau schlug den Mann. 5') Der Mann wurde (von der Frau)

geschlagen.

4格 (Akkusativ) 目的語が1格 (Nominativ) 主語に格の変換を起こしうるような項、あるいは、文の1格主語になる項を「構造的項」という。一方4)の *dem Kind* のように、受動態に変換しても格の変化をおこさない項を「語彙的項」という。動詞 *schlagen* は2個の構造的項を持ち、*helfen* は構造的項と語彙的項を1個ずつ持つ動詞である。

[θ -役割 (θ -Rolle, thematische-Rolle)]

動詞の意味に直接寄与する文の要素がそれぞれ分担する役割 (毛利: 1986、『言語』) のこと。動詞 *schenken* (プレゼントする) には、「プレゼントする行為者」と「プレゼント受領者」、及び「物としてのプレゼント」という役割関係にある三者の存在が認められる。それぞれ順に、「動作主体」、「(プレゼントの)到達点」、「テーマ(主題)」という意味的役割であるが、このような役割を広く「 θ -役割」といっている。次の文6)でそれぞれの θ -役割を担っている名詞句(項)が *Anna*、*ihm*、*ein Buch* である。

6) Anna schenkt ihm ein Buch.

この意味的役割は、述語と結び付く項には付与されていなければならない。

[θ -Kriterium (θ -基準) (Chomsky :1981 :36)]

1つの項は θ -役割を必ず1つだけ持ち、また1つの θ -役割は、必ず1つだけの項に付与される。この基準はD-構造(旧モデルの深層構造にあたる)でも、S-構造(旧モデルの表層構造にあたる)でも保たれていなければならない。例えば、文6)で「到達点」の θ -役割を持つ項 ihmが他の θ -役割(例えば、「動作主」)を付与されることはない。あるいはある θ -役割(「到達点」)が別の θ -役割(「テーマ」)に変わるということもない。もし二重に付与されるようなことがあれば、この基準に違反することになり、非文、不適格文として排除される。

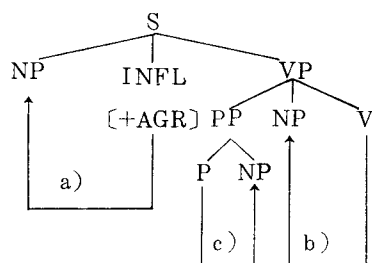
[格の付与について]

格の付与については次のように定義される (Chomsky, 1981 :170)。

- a) AGR に統率 (Govern⁴⁾ されている NP は主格 (NOMINATIV-Kasus) を付与される。
- b) 他動詞に統率されている NP は目的格 (OBJEKTIVE-Kasus) を付与される。
- c) 前置詞に統率されている NP は斜格 (OBLIQUE-Kasus) を付与される。

上の a), b), c) が図の a), b), c) に対応している。

7)



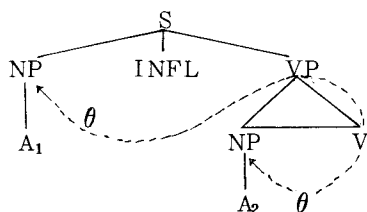
INFL (Inflektion) は時制、呼応 (Agreement) 法助動詞などからなる要素である。AGR は人称、数、性の呼応に関する素性を全部含むものとし、AGR は定形節 (文) におきる。

[格フィルターの原理]

音形を持つ NP は必ず格を持っていなければならない。音声形式がありながら格をもたない (付与されていない) NP があればその文は非文となる。

[externes Argument · internes Argument]

8)



他動詞 schlagen (殴る) は4格の目的語をとる動詞である。VPのHeadによって格の指定を受ける項 (A₂) は internes Argument (internal Argument) と呼ばれる。一方 INFL (AGR) に統率される項 (A₁) は externes Argument と呼ば

れる。 θ -役割は A_2 に対しては V から直接に、 A_1 には VP を通して間接的に付与される (Peter Sells, 1985: 35ff.)。

[Realisationsprinzip = RP (Haider, 1986: 9)]

構造的メルクマールの具現と extern な項の存在との関係を示す原理。

"Wenn ein funktionales Element F mit der Merkmalmenge M ein strukturelles Merkmal f realisiert, dann gibt es ein externes Argument."

(メルクマールの集合 M をもつ関数要素 F が構造的メルクマール f を具現するならば、1 つの extern な項が存在する。)

つまり、関数要素 (動詞) が構造的項をとると指定されると、それがとるべき項のうちの 1 つが extern な項として具現する、という原理と理解される。

例えば、構造的項を 2 個とる動詞 schlagen では、その 2 個の項のうちのどちらか一方が extern に具現することになる。さらに、ankommen (到着する) は 1 個だけの構造的項をとる動詞であるが、このような動詞の項は、RP に従うと自動的に extern に具現し主語位置にたつことになる (ankommen については 59 頁以下参照)。一方、動詞 schlagen の場合には、次項の DP の適用を受けて extern の項が指定される。

RP の原理は常に構造的項が対象となる (Haider, 1983: 60 参照)。

[Designationsprinzip (Haider, 1986: 10), Designierte Argumente (DA)]

関数要素が 1 つ以上の構造的であることを示すメルクマールを付与するなら、1 つの "extern" と指定されたメルクマールが存在する。 ("Weist ein funktionales Element mehr als ein strukturelles Merkmal zu, so gibt es ein als extern designiertes Merkmal.")

例えば動詞 schlagen の場合、2 つの構造的項 (A_1, A_2) のうち 1 つが特に extern に具現することの指定をされている、と解釈される。そのように指定された項を DA といい、 θ -役割が付与される項でもあって、(θ) と表示する。

例: schlagen: V (θ^S, θ^S)、schenken: V ($\theta^S, \theta^L, \theta^S$) S: 構造的、L: 語彙的

[助動詞の選択 (Haider, 1986: 10)]

DA が存在するならば haben を、DA が存在しなければ sein を選択する。

(θ) と表示される項 (DA) を持つ動詞は助動詞に haben を取り、その項がなければ助動詞に sein を取るという条件の事。

〔補足説明〕

ドイツ語では完了文をつくる際に、「場所の移動や状態の変化」などを表す自動詞に限って sein を選択し、その他の自動詞とすべての他動詞には haben を選択するという制約がある。さて文で主語として (INFL. AGR から NOMINATIV を付与されて) 具現するのは構造的項に共通することである。そこでこの項を持つ動詞がどちらの助動詞と結び付くかということが、上記の表示の方法で指示できる。具体例で確かめておく。例文には Haider (1983:78ff.) の引用も含む。

まず jm zustoßen (彼に不幸がふりかかる)、と jm helfen (男性が子供を助ける) の例をみる。それぞれ (θ^S, θ^L), (θ^S, θ^L) という項構造が与えられる。前者は sein を、後者は haben を取る動詞である。

*印は非文であることを示す。

- | | |
|--|--------------------------------------|
| 9) Ihm stößt ein Unglück zu. | 9') Dem Kind hilft der Mann. |
| 10) Ihm ist ein Unglück zugestoßen. | 10)* Dem Kind ist der Mann geholfen. |
| | (完了) |
| 11)* Ihm hat ein Unglück zugestoßen. | 11') Dem Kind hat der Mann geholfen. |
| | (完了) |
| 12)* Ihm wurde ein Unglück zugestoßen. | 12) Dem Kind wurde geholfen.(受動) |
| 13) das ihm zugestoßene Unglück. | 13)* der dem Kind geholfene Mann |
| | (付加語用法) |
| 14) Ein Unglück zugestoßen ist ihm | 14)* Ein Mann geholfen hat ihm |
| noch nie. | noch nie.(前域での主語+過去分詞) |
| 15) Unglück zugestoßen ist ihm | 15)* Mann geholfen hat ihm keiner. |
| keines. | (前域での主語+過去分詞) |

同様の関係は ankommen (到着する) と tanzen (踊る) にも見られる。どちらも項を1つだけ取る動詞である。

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 16) der angekommene Linguist | 16)* der getanzte Linguist. |
| 17) Ein Linguist angekommen ist | 17)* Ein Linguist getanzt hat |
| bisher nicht. | bisher nicht. |
| 18) Linguist angekommen ist bisher | 18)* Linguist getanzt hat bisher |
| nicht. | nicht. |

9)-18) を許す動詞は ergative Verben⁵⁾に見られるとされ (Haider, 1983:79) このような動詞の項は DA の表示を持たないものである。

19) ankommen (θ^S) -- tanzen (θ^S)

語彙登録 (lexical entry) の段階でこのような項の構造を示すことによって、即ち、DA の存在の有無が示されることによって、動詞の統語上の振る舞いがより明確にされよう。

2. 項をブロックする、ブロックを解除する / Partizip II • zu • haben • sein の役割

Haider は (1984¹) で、過去分詞 (Partizip II = P II)、zu, haben, sein はそれが存在するコンテキストでは、項をブロックし (具現を妨げ) たり、そのブロックを解除するなどの働きをする要素であると捉えている。これらの要素は haben を除けば、werden と共に受身文をつくる際に用いられる要素でもある。

結論から述べると次のようにまとめられる。

- a) P II は DA をブロックする。
- b) zu は externes Argument をブロックする。
- c) haben はブロックされた項を解除する。
- d) sein はブロックされた項を解除する働きがない。

以下 Haider にならって説明する。次にあげる動詞はそれぞれ () で示される項構造、 θ -構造を持つものとする。定形節はその右側に示してある。

- | | | |
|-------------------------------------|-------------------------|-------------|
| 20) ankommen (θ^S) | Der Gast kam an. | (客がきた。) |
| 21) tanzen (θ^S) | Der Gast tanzte. | (客が踊った。) |
| 22) helfen (θ^S, θ^L) | Der Gast half dem Kind. | (客が子供を助けた。) |
| 23) lesen (θ^S, θ^S) | Der Gast las das Buch. | (客が本を読んだ。) |

[P II の働き]

それぞれの動詞の P II は付加語形容詞的な用法を持つ。しかし次の例で明らかなように、20) の P II が主語連関 (Subjektbezug) の名詞を許容するのに対し他の P II は目的語連関 (Objektbezug) の名詞を許容する。即ちこの P II が存在するコンテキストでは、(θ) で表示されている DA は具現できないことが分かる。

- | | |
|---------------------------------------|-----------|
| 24) der angekommene Gast | (到着した客) |
| 25)*der getanzte Gast | (踊った客) |
| 26)*der dem Kind geholfene Gast | (子供を助けた客) |
| 27)*der das Buch gelesene Gast | (本を読んだ客) |
| 28) das (von dem Gast) geholfene Kind | (助けられた子供) |

29) das (von dem Gast) gelesene Buch (読まれた本)

この現象は PII が Kopula と用いられたコンテキストでも同一である。48)-53) を参照。

30) Der Gast ist angekommen.

31)*Der Gast ist getanzt. (*Subjektbezug)

32)*Der Gast ist geholfen. (*Subjektbezug)

33)*Der Gast ist gelesen. (*Subjektbezug)

34) Dem Kind ist geholfen. (Objektbezug)

35) Das Buch ist gelesen. (Objektbezug)

以上の例から PII によって DA がブロックされていることが理解される。

一方 Partizip I (PI) それ自体にはブロック作用がない。

36) der ankommende Gast (到着する客)

37) der tanzende Gast

38) der dem Kind helfende Gast

39) der das Buch lesende Gast

[zu の働き]

zu と共に用いた場合を見よう。zu は zu + PI、sein + zu + Infinitiv、haben + zu + Infinitiv などのコンテキストで用いられる。先に PI にはブロック作用がないと述べたが zu が存在すると事情は異なる。zu + PI の付加語形容詞的用法と、sein + zu + Infinitiv の用法とを比較してみる。

40)*der anzukommende Gast 40)*Der Gast ist anzukommen.

(到着すべき客)

41)*der zu tanzende Gast 41)*Der Gast ist zu tanzen.

42)*der dem Kind zu helfende Gast 42)*Der Gast ist dem Kind zu helfen.

43)*der das Buch zu lesende Gast 43)*Der Gast ist das Buch zu lesen.

44) das zu helfende Kind 44) Dem Kind ist zu helfen. (子供は助

(助けられるべき子供) けられなければならない)

45) das zu lesende Buch 45) Das Buch ist zu lesen.

44)~45) は受動内容の句あるいは文である。40) では ankommen に 1 つだけ備わっている構造的項が具現されて非文となる。また 41) 42) 43) では、DA となっている構造的項が具現されて非文となる。上の対照で共通しているのは、定形節では主語 (Nominativ) として具現する項 (構造的項) が、zu の現れるコンテキストでは具現されないということである⁶⁾

P IIによるブロックと zuによるブロックでは、その対象とブロックの仕方に違いが認められる。P IIは語彙的に designierte externe Argumenteをブロックするのに対して、 zuの場合、統語的に externe Argumenteをブロックする (Haider:1984¹)。

[haben の働き]

次に haben の場合、完了文で、また zu+Infinitiv と共に用いられても、共起する本動詞の項がすべて具現することになる。

46)*Der Gast hat angekommen. 46') Der Gast hat anzukommen.

(助動詞選択の誤り)

47) Der Gast hat getanzt. 47') Der Gast hat zu tanzen.

(客はおどった)

(客はおどらなければならない)

他の例を省くが、31)と47)、40')と46')・47')とを比較すると顕著に見られるように、P IIでブロックされる項(DA)、ならびに zu でブロックされる構造的項が具現されている。このことから "haben" はブロックした項を解除し具現させる働きを持つとする。

[sein の働き]

habenはP II や zuによってブロックされた DA や構造的項を解除するが、解除という観点では、seinはその働きを持たない。

48) Der Gast hat das Buch gelesen.

49) Das Buch ist gelesen.

50) Der Gast hat das Buch zu lesen.

51) Das Buch ist zu lesen.

habenはP II (gelesen)や zuによってブロックされた項を主語として具現しているが、一方、sein コンテキストではブロックされたまま具現されない。つまり、sein+P II、sein+zu+Infinitiv の項として存在できないことになる。つぎの例も、ブロックされた項を sein は具現する働きを持たないということを示す。

52)*Der Gast ist das Buch gelesen.

53)*Der Gast ist das Buch zu lesen.

sein についてブロック解除の働きをしないと述べたが、30)、34)、35)、44')、45')、及び49)、51)から分かるように具現する項は、すべて intern な項である。従って、ブロック解除の働きはしないが、internの項を具現する働きが sein に認められる。

ブロック・解除によって、不適格文を説明する。(Haider:1986, 12ff.)

54)*Ihm hat zu helfen.

54')Ihm ist zu helfen.

55)Ihm hat geholfen zu werden.

55')*Ihm ist geholfen zu werden.

54)では、zuがhelfenの2項(A_1, A_2)のうち、 A_1 をブロックし、hatはそれを解除しているにもかかわらず、解除された項のNPの担い手が存在せず、 θ -基準に違反する。54')では、istが A_1 を解除しないままにしており、 A_1 (DA)はzuによってブロックされている。

55)では、geholfen zu werden hatの順でみることにする。ここでは、P IIはDAをブロックし、zuはwerdenをブロックし、hatがzuのブロック作用を解除する。結局zuとhabenが相互に作用しあい、geholfenのブロック作用だけが生きることになる。 A_2 が適性に θ -役割を担って具現している。

一方、55')では、P IIがDA(A_1)をブロックし、zuはwerdenが具現する要素(A_2)をブロックし、更に、istは解除作用を持たないのでihmには、 θ -役割が備わっていない。 θ -役割の備わっていない項は具現できない(θ -基準に違反し非文となる)。なお、werdenにはブロック作用を認めない。seinと同様具現できる項を引き受けてそのまま具現させる働きを持つ。55')では、同一コンテキストに、seinとwerdenの同じ役割を持つ2つの要素(動詞)があり、このような場合、つまり同一機能反復は非文になる、とする。次のmodalがくり返される例でも非文であるとする。

(Haider:1986, 14ff.)

56)*Er hat zu helfen zu haben.

以上、ブロックということについて、ブロックされる項、ブロックする要素、ブロックを解除する要素などについてのまとめとする。

3. 受 動 の 定 義

受動態(文)について構文とその例が次のように示される(Haider, 1986:5)。

57)

a) ergativierte Verben a) Der Schnee schmilzt. (Die Sonne schmilzt den Schnee.)

b) werden + P II (動作受動) b) Der Schnee wird geschmolzen.

c) sein + P II (状態受動) c) Der Schnee ist geschmolzen.

d) sein + zu + Infinitiv d) Der Schnee ist zu schmelzen.

e) Medialkonstruktion e) Schnee schmilzt sich leicht.

例示した動詞schmelzenは、2つの構造項を持つ他動詞である。a)が示しているのは、例文の

主語がもともと、この他動詞の「論理的目的語」であり、従って「論理的主語」を欠いた構成の動詞として用いられ、受動の解釈を受けるということである。「論理的主語」を欠き「論理的目的語」を主語に据えることによって自動詞と同様に行動する動詞を *ergativierte Verben* (アーガティブ化した動詞) としている。この動詞は、20) で示した動詞と同じ行動をする。

再帰代名詞 *sich* を用いた *Medialkonstruktion* (M-Sich = M-S) 57 e) については、Haider (1985) で詳しく分析されている。57 e) の主語 *Schnee* は、2項をとる動詞 *schmelzen*, V: (θ , θ) の2番目の項、即ち「論理的目的語」である。従って 57 a) 同様自動詞の受動の解釈を受ける。ただし前方照応 (*anaphorisch*) の再帰代名詞とは違って、M-S は *Referenz* になっていないので *Schnee* を先行詞としない。M-S の担う役割について、次のように理解される。この構文では、論理的主語を任意に (*von*・・・の形で) 加えることができない。しかし文中の語彙のどれかがその「論理的主語」、即ち、AGENS という θ -役割を担う可能性を考え、それを *sich* が引き受けているとしている。 θ -役割を担ってはいても、項位置をひきうけない要素 (\bar{A}) と見なす。

ブロックとのかかわりで見ると、P II、*zu* を用いた場合、及び 57 b)、57 c)、57 d) では、DA がブロックされて受動文が作られている。また、アーガティブ化した動詞、*Medial* 構文でも、DA が脱落しているのが分かる。

Rezipientenpassiv (Helbig/Buscha: 184=1.8.10.1) は、*bekommen*, *erhalten*, *kriegen* と P II との組み合わせで構成される受動文である。表面的特徴は *bekommen* などの主語が P II になっている動詞の間接目的語という点である。例えば、文 58) に対応する受動文 59) では、間接目的語の格変化は起きない。語彙的項なのである。

58) *Ihm schenkte Anna ein Buch.*

59) *Ihm wurde ein Buch geschenkt.*

一方 *kriegen* を用いると、語彙的項である間接目的語は格を変え 1 格主語にならなければいけない。

60) **Ihm kriegte ein Buch geschenkt.*

61) *Er kriegte ein Buch (von Anna) geschenkt.*

また、間接目的語をとる動詞でも、*helfen* のような自動詞にはこの構文は用いられず、他動詞に限られる (Haider, 1986: 5)。⁷⁾

62) **Er kriegte geholfen.*

さて 61) にみられるように *schenken* の主語の *Anna* は、任意に前置詞を伴って表されるものの、決して必須の項ではない。*schenken* の項構造は次のように示されることから、

schenken, :V (θ^s , θ^t , θ^s)、(θ) = DA

受動文 59) でも、また 61) についても、やはり DA が脱落しているのが確認されよう。Haider によ

れば、受動は広義の受動概念と狭義の概念で定義される。

63) 受動(広義) : 受動とは、項が減少するコンテキスト(Reduktionskontext)を形成し、その減少項が DA であるような構文である。

64) 受動(狭義) : 受動とは、形態論上一義的にコード化した DA の減少過程である。
(狭義ではドイツ語の受動は werden と P II で構成される。)

4. 準助動詞 bekommen, erhalten, kriegen (Haider, 1986: 19ff.)

bekommen, erhalten, kriegen などは、動詞の P II と共に用いられて受身の文を構成する。一見受動の助動詞の werden と同じ受動助動詞の仲間とも見なされそうである。またこの3つの動詞は、zu + Inf. と共に用いられ(・・・しなければならない、・・・できる、・・・させてもらう、などの意)、その用法は、haben + zu + Inf. 構文での haben に似ているように思われる。そこで、Rezipientenpassiv で用いられる3つの動詞について分析することになる。

さて θ -役割は、助動詞構文であっても、そこで用いられている本動詞の持つ θ -構造が支配するのであって、助動詞が本動詞の θ -役割を勝手に変えることはないと考えられる。

65) Er hat ein Buch. 66) Er hat ein Buch gelesen/zu lesen.

文66)の助動詞構文においても、本動詞の θ -構造それ自体に変化はない。つまり構成項にそれぞれ与えられる(AGENS), (THEMA)のような θ -役割と構造的項は不変である。従って助動詞 haben は θ -役割に対する独自の制限をせず、また独自の θ -構造も持たないと考えられる。一方、kriegen など(kriegen を代表とする)を用いると、それが本動詞の場合も助動詞の場合にも、本動詞としての kriegen が持つ θ -構造をそのまま充てていると考えられる。

67) Er kriegt etwas. 68) Er kriegt etwas geschenkt.

schenken の間接目的語(到達点-ZIEL-という θ -役割を持つ)が格を変えている、ということが、haben とは異なるなんらかの θ -制約をしているということであろう。

また、助動詞の選択(完了)にも特徴がある。受動文の完了では、普通 sein が選択されるが、kriegen などでは haben が選択される。

69) Ihm wird ein Buch geschenkt. 69) Ihm ist ein Buch geschenkt
worden.

70) Er kriegt ein Buch geschenkt. 70) Er hat ein Buch geschenkt
gekriegt.

71)*Er ist ein Buch geschenkt
gekriegt.

助動詞 haben にブロックを解除する働きがあったが、この kriegen が haben 同様の助動詞として機能するならば、DA が解除されて具現してもよさそうなものであるが、そうではない。このような事実から助動詞としての kriegen は独自の θ -構造を持ち、しかも、DA を持つという推論がたてられる。

kriegen の θ -構造が P II の θ -構造に寄生する / parasitäre Verben (Haider, 1986: 21)

kriegen の θ -構造と schenken のそれとを比較すると重なり合う構造であることが分かる。

72) kriegen: V(<f₁, ZIEL>, <f₂, THEMA> (f₁, f₂: 構造的))

73) schenken: V(<f₁, AGENS>, <f₂, ZIEL>, <f₃, THEMA>
(f₁, f₃: 構造的; f₂: (DAT) 不変)) f = DA

61) 62) から理解できるように、kriegen, bekommen, erhalten は θ -構造が一致する動詞(過去分詞)とだけ共起する。しかし θ -構造は重なっているにしても、格の具現にかかわる格メルクマールは一致していない。kriegen, bekommen, erhalten は DA の主語に <到達点> というテーマ機能を持つ。これは他の動詞でなら間接目的語 (Dativ) で示されるものである (73)。またこの 3 個の動詞はいずれも他動詞である。

Haider はここで kriegen のもう一つの用法、即ち、zu Infinitiv をともなう用法と比較しながら、ブロックと解除の面から、統語的側面をも解明している。(Haider, 1986: 22)

74) Er hat etwas zu tun.

75) Er kriegt etwas zu tun.

76) Ihr wurde ein Preis verliehen.

77) Sie kriegte einen Preis verliehen.

78) Jemand hat ihr einen Preis verliehen.

79)*Jemand kriegt ihr einen Preis verliehen.

ブロックには語彙的なものと統語的なものがあった。P II によるブロックは語彙的で、zu によるブロックは統語的である。74)、75) では zu による統語的ブロック(統語的にブロックされた動詞)を haben/kriegen が活性化している(ブロックの解除を行う)。一方 77)、79) では、P II による語彙的ブロック(DA のブロック)が解除されない。RP によれば構造的項は extern に具現することが定められていて、助動詞 sein/werden 共に具現を妨げない。しかし kriegen の主語は P II の Dativ 目的語であり RP による具現では説明されない。即ち、kriegen + P II には RP は有効ではない。

ところでブロック解除が目標にするのは、以下の 3 点とされる。なお項には、格メルクマールと θ -役割とが対になって付与されている。

- a) ブロックされた対が全体として活性化(解除)される。
- b) 格メルマルが活性化される。
- c) θ -役割が活性化される。

助動詞は、ある NP に格メルマルが具現することを許し(=b))、これによって対応する θ -役割がその NP に付与される、結果として a) になるという過程が一般的パターンと考えられる。これとは逆に c) から始まるパターンを kriegen に求める。

動詞要素は格メルマルを持っているものとし、しかし定まった特別の θ -役割は持っていない。この θ -役割は、動詞要素が同じ動詞複合体(Verbalkomplex)内の他の動詞から受け取る。従って θ -構造には、一方の項要素部に格メルマルはあるが θ -役割は入っていない構造を想定することになる。

80) $V(\langle f_1, \underline{e} \rangle \langle f_2, e \rangle) (f_1, f_2: \text{構造的})$

"e"で示されるように θ -役割は潜在的(virtuell)なものである。またこの θ -構造は同一の構造を含む PII - この PII から当の θ -役割を受け取る - に寄生している。

もし θ -役割が受け取られず格メルマルが具現してしまうと、 θ -役割の一致はなくなる。kriegen が zu + Infinitiv と用いられる場合(75)である。不定詞の主語(externes Argument)が kriegen の主語と一致する。ここでは、不定詞主語の θ -役割(AGENS)が kriegen の主語の θ -役割に転写されていない。

kriegen, bekommen, erhalten の3個の動詞は助動詞として用いられる場合、独特の振る舞いがあり、それは特別の θ -構造を想定することによって解明される。

以上ブロックをしたりあるいはブロックを解除する現象や、それにかかわる要素にふれながら、

受動とは、統語的に項(DA)の脱落(減少)によること、

Rezipientenpassiv は寄生動詞をともなった項脱落(減少)構文であること、

その寄生動詞はexternな項がZIEL(到達点)という θ -役割を持つものであること、

など、受動一般について、また Rezipientenpassiv について統語的メカニズムが明らかにされてきた。

5. まとめ に代えて

kriegen, bekommen, erhalten を用いた Rezipientenpassiv の分析にはかなり特殊な θ -構造をたて、格付与とからめ、ブロック・ブロック解除などと合わせて説明する羽目になっているが、このいささか複雑とも思える手順によって、意味的側面 - kriegen の主語が PII の間接目的語と同一の θ -役割を持つ - と、統語的側面との関連が総合的に分析されていると考えられる。最近

の生成文法が意味的側面も統語論に取り込んで扱うことが可能になった、つまりより充実してきたということによるのもあろう。動詞の構成項の θ -構造、項構造をとらえることによって、伝統文法では羅列的に説明されている受身文について、統語的に全般的に把握し直し、普遍的な説明が可能ならば、言語現象を説明する有効な方法論となろう。

ここでとられた方法論は、受動文は能動文から変形によって導かれる、という見解ではなく、受身文にはあくまでも受身の動詞を認めるという立場でのアプローチであると考えられる。

Haiderは更に動詞群 (komplexe Verbgruppe) をとりあげて、Rezipientenpassivで想定したようにいくつかの θ -構造を想定し、方法論上の一般化を行っているが、拙稿では Rezipientenpassivに限ってとりあえずの紹介とする。

注

- 1) Deutsche Grammatik (1986), 1.8.10., S. 184ff. 参照。"Adressatenpassiv", "indirektes Passiv"とも呼ばれる。
- 2) この3つの動詞については、木藤 (1980, 『エネルギー』) が意味論の観点から詳しい分析を行っている。P II を伴う構文については分析していないが、この構文の場合もその現れ方は木藤の図示した型にあてはまる。erhalten (以下 e.) は現れ方に制限があるが、bekommen (以下 b.) と kriegen (以下 k.) は相互に置き換え可能である。? : 容認度が低い、* : 容認されない。
Ich b. / k. / e. die Schulden erlassen.
Ich b. / k. / ?e. ein Kleid genäht.
Ich b. / k. / *e. den Brief von meinem Chef diktiert.
Ich b. / k. / *e. widersprochen/gratuliert.
a) Ich b. / k. / ?e. das Glas gewaschen.
インフォーマントチェックでは a) のように erhalten の容認度が低いとされたが、次の b) では、
b) Ich b. / k. / e. von der Mutter seine Hände gewaschen.
容認されるとの一応の結果を得た。更に吟味する必要があるが、このチェックに従えば gewaschen との共起に微妙な違いが存在すると考えられる。b./k./e. 三者の意味的な違いが [所有の移動]、[状態の変化]、[結果性] という基準で類別されるにしても、a), b) の e. についてはそれだけでは説明しきれないと考えられる。今後の課題としておきたい。
- 3) Haiderはこのような (expletiv の) es は COMP 位置に立てている。Haider (1985¹:10) 参照。
- 4) 統率：もし (i) α が β を c-統御し、かつ (ii) β を支配する最大投射がどれもみな α をも支配して

いるならば、 α は β を統率するという。ただし α は語彙範疇(N,V,A,P), AGRに限る。(主要部がその補部にたいして持つ関係を捉えようとしたもの。最大投射は語彙範疇の最大投射(NP, VP, AP, PP)のほか、S'も含む。)

c-統御: 2つの節点a,bがいずれも他を支配せず、かつ、aを支配する最初の枝分かれ節点がbを支配するならば、節点aはbをc-統御するという。

5) ergative Verben (アーガティブ動詞)については、池上(1981)を参照。Haiderはankommen など、完了でseinをとる動詞類をアーガティブ動詞に分類している。「アーガティブ」についての断りがないがHaiderにならうこととする。なお10)から15)の構成は形容詞でも同様に見られ(例: jm treu sein)、また形容詞が構造的項を最大で1つしかとらないことから、形容詞もアーガティブであるとしている。(Haider, 1983)。

6) 次の文で、zu + Inf.は埋め込み文と分析される(Haider, 1986:9)。

Der Gast versucht zu tanzen. [Der Gast versucht [PRO zu tanzen]]
tanzenの主語はzuによりブロックされ具現しない。P II / zu + Inf. と用いられるsein/habenは助動詞(AUX)であり、同一のS内にある。versuchenは本動詞扱いとなる。

7) 実は参考文献中のWEGENERの論文の題目にもあるように3格目的語をとる自動詞、jm widersprechen, も可能である。69) 70)で示されるようなものと同じ θ -構造を想定することはできないが、3格目的語の θ -役割がkriegen(<ZIEL>)と重なり合うことから可能になるのかも知れない。

参 考 文 献

- CHOMSKY, N. (1981): Lectures on Government and Binding. Dordrecht: Foris.
- HAIDER, HUBERT (1983): "The Case of German". Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik 22:47-100 (=Studies in German Grammar (Studies in Generative Grammar 21) 66-101, Jindřich Toman (Hrsg.) Foris Publications 1985)
- HAIDER, H. (1984): "Mona Lisa lächelt stumm - Über das sogenannte deutsche 'Rezipientenpassiv'". Linguistische Berichte 89:32-42.

- HAIDER, H. (1984¹): "Was zu haben ist und was zu sein hat – Bemerkungen zum Infinitiv." Papier zur Linguistik 30: 23-36.
- HAIDER, H. (1985): "Von 'sein' oder nicht 'sein': zur Grammatik des Pronomens 'sich'". Erklärende Syntax des Deutschen (=Studien zur deutschen Grammatik, 25), 223-254.
- HAIDER, H. (1985¹): "A Unified Account of Case and θ -Marking". Papier zur Linguistik, 32:3-36.
- HAIDER, H. (1986): "Fehlende Argumente: vom Passiv zu kohärenten Infinitiven". Linguistische Berichte 101: 3-33.
- HELBIG/BUSCHA(1986): Deutsche Grammatik. Enzyklopädie Leipzig.
- REIS, MARGA (1985): "Mona Lisa kriegt zuviel." Linguistische Berichte 96:140-155.
- SELLS, PETER (1985): Lectures on Contemporary syntactic Theories. Center for the Study of Language and Information. Stanford.
- WEGENER, HEIDE(1985): "Er bekommt widersprochen." Linguistische Berichte 96: 27-139.
- 池上 嘉彦(1981): 『「する」と「なる」の言語学』、大修館
- 木藤 冬樹(1980): 「Kollokation による類義語分析 1979¹」、『エネルギー』6号、74-96頁。
- 毛利 可信(1986): 「伝統文法からみた生成文法」、『言語』、Vol. 15, No. 12.、大修館、134-140頁。

(北海道薬科大学講師)